

『殉恋王子』  
著：辻内弥里  
ill：さばるどろ

「シュリ」

はい、と打てば響く素早さで彼が返す。

「どうして、あんなことをした？」

「それはもちろん、ディーネ様を護るために」

「違う。宿屋での、夜のことだ」

滑らかだったシュリの受け答えが止まった。

唇を薄く開いたまま、瞠目して凍りつく。

「理由が知りたい。……おまえの口から、聞きたい」

シュリはいつでも望む時に、一番欲しい言葉をくれた。それが嬉しくて、支えになって、倒れ込むように彼に心を傾けた。

そんな彼が今、初めて自分の前で言葉に窮している。

話せないのは後ろ暗いからか。引きずり出そうとしている本心は、どんな色をしていても、彼と自分との関係を大きく変えるのだろう。

だが、だからこそ、知りたい。

決めたことから逃げたくない。前に踏み出す強さをくれたのは、他ならぬ彼だ。

永遠に感じられるような長い沈黙を、ディーネはシュリから目を逸らさずに耐えた。

やがて彼が観念したように息を吐き出し、伏し目がちで自分と視線を合わせないまま、こう言った。

「私のことは遠ざけてください。それが、貴方のためです」

「……え？」

あまりにもいつもの彼らしい生真面目な口調だったので、逆に意味を理解するまで時間を要した。

（とお、ざけ、る……？）

突きつけられた拒絶がじわじわと思考を浸食していく。体中の体温を奪っていくような冷たい目眩は、しかし次の瞬間、激しい怒りとなって爆発した。

「ふ、ざけんな！ 全然答えになってねえんだよっ！」

思わず彼の胸倉に掴みかかる。

しかし彼は落ち着いたまま、包帯の巻かれていない手を宥めるようにそっと重ねる。

「王位継承者ともあろう方が、臣下に組み敷かれて体を自由にされていいはずがない。おわかりでしょう？」

「おまえがそれを言うのかっ！」

「私はまた、貴方の気持ちにつけ込むかもしれない。目を覚ましたとしても貴方が拒まないことを、私は知っていましたから」

あやすようにポンポンと手を叩く仕草が、心の柔らかいところを甘く、そして残酷に抉る。怒りに燃えていた瞳が揺らいでしまうほど、彼の手つきはこんな時でさえ優しく、ずるい。

「貴方は、気の迷いに振り回されて、全てを失っていい人じゃない」

「気の、迷い……？」

「神が……神の庭におわす貴方のお母上が、ご覧になっています」

今際の際の母の凄絶さが、脳裏に甦る。

落ち窪んだ眼窩と痩せこけた頬、握り締めた手に痕を残すほど枯れ枝のような指先が食い込み、西宮への恨みを唱えながら彼女は事切れた。優しく快活だった頃の母を知るからこそ、変わり果てた姿は痛烈な印象を刻み、自分を玉座へとせき立てる根源的な恐怖となった。

神なんていない。けれど、母は死してなお、自分を見ている。

夜闇の中を忍んで来たほどの激情が、急速に萎む。

悄然とした自分に言い聞かせるように、シュリは掴んだ指を一本一本開き、外していく。

「諦めてください。私をこれ以上手に入れることなど、考えてはいけません」

指を全て剥がされて、トンと軽く肩を押された。

すっかり気力を失った体が、冷たい椅子へと落下する。

「どうして……？」

「私が貴方の、弱味になるからです。私につけ込まれ……そしてまた、誰かにつけ入られる、弱点とになってしまう」

「じゃく、てん」

「王となる人に、そんなものはあってはいけないでしょう？」

——あってはいけない？ 自分の行く末に、彼が要らないだって？

さっきとは比べものにならないほど強大な炎が、腹の底から湧き上がってくるのを感じた。シュリを失ってしまう恐怖を味わって以来、ずっと心を占めているたった一つの想い。それは炎となってどんどん膨れ上がり、視界を真っ赤に染めるほどに全身を覆い尽くす。

「……嫌だ。いやだ……絶対に嫌だ！」

頑是無い子供のように首を振り、その胸に縋りつく。抱き返す腕はなかったけれど、押し返されもしない。

想い自体を拒まれているわけではない。扉の鍵は開いている。

確信し、そして彼の左手にある腕輪を視界の隅に認めた瞬間、ディーネの心は決まった。

「シュリ、俺は、王位を諦めない」

「そのためには」

「それでおまえのことも、諦めたくない！ おまえをずっと独り占めしてたい、誰にも渡したくない。俺はおまえが……好きなんだから！」

抱きついたまま、半ば叫ぶように初めて彼へ想いを告げた。

胸の中で秘めていた花が咲く。彼が困惑に顔を歪めても止まらない。次から次へと咲き乱れ、彼へと向かう想いの奔流となる。

「本当に俺を大事に思ってくれるなら、離れることじゃなくて護る方法を考えろ！ 俺は、おまえがいなきゃダメなんだ！」

「そう仕向けられただけですよ」

「おまえに？ 上等だ。だったらちゃんと責任とって、俺をおまえのものにしてみせろよ！」

鼻を擦りつけるようにして彼の匂いを吸い込むと、あの夜自分に覆い被さり貪った、男の匂いが鼻腔をくすぐった。

間違いない、あれは彼だ。

彼は眠る自分に欲情し、夢と偽って体を求めたのだ。——こうやって。

「っ……」

襟元に覗く鎖骨の盛り上がり、唇を押しつける。鼻から抜ける彼の吐息は、身震いするほど大人の男のものだった。自分を女のように組み敷いて、欲望を擦りつけた雄のものだ。

あの夜、力任せに抱き締められた感覚が甦って恍惚とする。その醜態感に後押しされて、包帯の巻かれていない彼の手首を掴み、開かせた掌を腹に押しつけた。

「ここにおまえのをぶちまけたってことは、俺に勃つんだろ？」

円を描くように撫でさせれば、じんと腰骨が痺れるような感覚が湧き上がる。知らずこぼれたぬるい吐息が、彼の尖った喉仏に吹きかかる。

「俺のこと抱けるなら、やれよ。今度は最後まで」

上目遣いにかがう先、ダークブラウンの瞳を揺らすのは怯え——だけではない。自分と同じ艶いた色でくすぐり始めた、情欲の火種が見える。

「いけません。よしてください、ディーネ様」

「嫌だ、じゃないんだな？」

「出来ませ……っ！」

彼が呻くように息を呑む。手をさらに下へ滑らせ、無理矢理ディーネ自身を握らせた。

既に反応を見せ始めていたそこは、彼の大きな手に包まれてなお一層熱を得る。

自ら誘う恥じらいに朱く染まりそうな頬を、甘えるみたいに彼の胸に押しつけた。眉根を寄せて首を横に打ち振るくせに、彼は自分を振り払いも突き飛ばしもしない。透かし見える彼の本心に、自分こそがつけ込んでいく。

「シュリ……」

喘ぐみたいに彼の名を呼んだ。石のように固まっている掌に、高まる熱を擦りつけて。

本当は無茶苦茶に恥ずかしい。心臓が破れそうなほど鼓動が速い。

でも、それ以上に、シュリが欲しい。

言葉を封じるように唇を引き結びながらも、色を変え始めている瞳で自分に視線を注ぐこの男が欲しい。誓ってくれた忠誠もずるい逃げ方も、何もかも抱き締めて振り向かせたいほど愛しくて——好きだ。

シュリが好きだ。

「これを逃したら、二度と触らせてやらないからな。寝込みだってもう、襲わせてやらない」

「ディーネ、様……」

「シュリ……好きだ。好きなんだ、シュリ……」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>